

秋天の青もどしたし白内障【しろそこひ】 与史

広辞苑によれば「しろそこひ」は白内障の俗称とされ、「しろそこひ」の本来の漢字表記は「白底翳」である。余程の難読文字は別として、通常、俳句にはルビは振らないとされている。句座をともにする連衆の教養学識を信じるものとされている。逆に言えば、信じ合うもの同士が句座を組むとされている。俳句は和歌と同様に耳から鑑賞者に伝達されるものであるから、表記された漢字の本来の読み方以外の独自の詠み方を指定されても困る、ということもある。

とは言っても、掲句の「しろそこひ」には、右のような常識論はあてはまらない。どの世界でも原則には例外があるのである。「白内障」に「しろそこひ」とのルビを振ることによって、下五を定型どおりの五音にして音調を整えると同時に、「青」と「白」の色彩の対比を明瞭化したのである。「白内障」を「はくないしよう」と読ませるのでは、すっきりしたりリズム感はず、色彩対比もぼやけたものになってしまう。

ルビ振りの絶妙さに加えて掲句の上手いところは、「もどしたし」である。これが「戻りけり」と過去形になっていたら、平凡な一句になっていただであろう。切実なる願望の句にしたことによって、人の心に訴えかける力が掲句に生まれたのである。

われよりも母を知る妻初秋刀魚

貞勝

いつも父母や家族のことを気にかけてながらも、永年にわたり仕事一途に人生の多くの時間を過ごしてきた日本男子の偽らざる心の一句である。妻には照れくさくて面と向かって有難うとは言えない夫が、この秋初めての秋刀魚を焼きながら、心の中でふと呟いた言葉であろう。対面の言葉かけはともかくとして、文字にすると素直に感謝の気持ちを表せるのである。俳句はまさに一行日記なのかも知れない。今は家に居る息子とその良き配偶者の暖かい眼差しの中に、お母様は老境の日々を楽しく生きておられるのであろう。

正装に照れしポーズや七五三

溪水

酒のコマーシャルではないが、「何も足さず何も引かず」の本質そのものを愛する純真な一句である。孫あるいは曾孫であるのかも知れないが、人生の最初の晴れ舞台である写真スタジオの少し強い照明の下に、祖父から贈られた晴れ着に身を包み、照れながらも懸命にポーズをとろうとしている童の姿。その童に注がれる眼差しのあたたかさが感じられる。カメラマンは上手くシャッターチャンス捉えることができたのであろうか。

「噴水」は本来的に夏の季語である。歳時記の春の部には「春の噴水」という季語はなく、秋の部には「秋の噴水」という季語はなく、冬の部においてのみ「冬の噴水」という季語がある。俳人は、夏と冬という両極端の季節においてのみ「噴水」に季語性を認めているのである。

このことは何を意味しているのだろうか。冬に見かけた噴水だから「冬の噴水」と短絡的に言うのでは、季語としての「冬の噴水」を使ったことにはならないということである。「冬の噴水」の季語の重心は「冬の」にあり、「冬だからこそその噴水」が感じられるように作句しなければならぬ。

掲句の作者は、「噴水のもつれ」、「そのもつれは音を立てる程である」と言うことによつて、「冬の噴水」を見事に詠み取ったのである。

夏においても噴水が風に煽られてもつれることはあろうが、「音立てるもつれ」と言われることによつて、鑑賞者には「冬」が感じ取れるのである。

小鳥らのためらひなく来手水鉢

ヤエ子

秋になって渡つて来る鳥（渡り鳥）である。通常、「小鳥来る」と使う。掲句は、「小鳥」と「来る」を分断し、その間に「ためらひなく」という言葉を挿入し、来た場所を「手水鉢」と特定している。

渡りが長旅であったので、到着するやいなや水を求めて真っ先に「手水鉢」に降り立ったと見るか、到着してから大分日数が立ち、周囲への警戒心が弱まったなか、手水鉢の水に戯れようとして手水鉢に降り立ったと見るかは、鑑賞者の自由であろう。

風呂敷の空解【ほど】けて風に文化の日

幸

風呂敷は日本の伝統的な生活用具の一つである。何かを包んでいた風呂敷を解いたら、風に煽られたというさり気ない句である。しかし、これはさり気なさを装った挑戦句であるように思われる。

鑑賞が難しい句であるが、筆者は、「空解け」と表記して「ほどけ」とルビを振った作者の意図を手掛かりにしたい。単に「ほどける」ならば、「解ける」の漢字表現が一般的であるにもかかわらず、作者が「空」という漢字を頭に付けたことの意味を、深く考えたいのである。

伝統文化あるいは現代文化といっても、人の世の悠久な時間の流れから見れば、いずれも確然としたものではなく、遅かれ早かれ泡沫のように消えるものである、すなわち、何かを包んでいたのに、それは根源的思索から言えば、「空（くう）からっぽ」である、

と思われるのである。掲句は、「文化の日」の句としては、異色であり秀句である。

会場・桜蔭会館 文責・増田 守

【事務連絡】

以前俳話会に参加されておられました坂本則敏さん（高校二十二回）から、継続したいとのご連絡がありました。眼科医と言う仕事柄、土曜日・日曜日はクリニックを休めないので、月例会には不在投句の形で参加されるとのことでした。